北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

思い出

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 行雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/10713

思い出

石井行雄

（一）

足掛け三十年近くも奉職し続けて居れば、二つや三つの思い出はある。

そんな中から、一つだけ披露する。

平成甲申の年（十六、西紀二〇〇四）であった。故・比良輝夫先生に、不在中のあれこれを、お願いして、半年間の内地留学の機会を頂いた。

期間中は、杉山正明先生（京都大学・東洋史）のところで、お世話になった。

居を、釧路から京洛に移してみると、気候の差のみでなく、生活の質の差とでも言ったものに、敏感になった。

どこを歩いていても、そこには人の跡が見え隠れして居た。過去の人のものであれば、史跡として、現代の人のものであれば活動として、目の前にあった。釧路にいるときは、目前の活動に対しての、応対としてのみ生活はあった。しかし、京洛の生活は眼前への対応を抽象化するものであった。これは窮屈な感のするものであった。一方、現実が今にのみ縛られなくなる契機でもあった。

街並みの中に、現実に営業している居酒屋があり、事務所があり、コンビニがあり、その並びに、二・三百年前に造られたお堂やら、お社（やしろ）やらが存在して居るのである。

大きな寺社が、一定の大きな区画を占めているのとは、様子が違うのである。当然、京洛の地にも大寺・大社は存在しているのであるが、こうした街並みの中に存在する、お堂お社のあり方は独特である。又、それが市街全域に及んでいるのである。

こうした中で営まれる生活は、釧路の生活とは質が異なる。

当時は、こんな風（ふう）だった。

（二）

大学の図書館（以下は中央図書館の例）についても、質の差を考えること頻りであった。

当時は、ＯＰＡＣ導入の初期で、ＰＣ検索と同時に、カード検索に対応すべく、カードボックスが並んでいた。（現在は知

らない）このカードの内容は、誠に懇切で、古典籍の場合、受け入れ時期と、有縁の教官名の記載されているものが多かった。

地下書庫の「京」の棚には、京都関係の江戸時代の資料が多く集められていた。カード検索後に入庫すると、メモしていたわけではないが、受入れ時期と教官名が頭に残っていることが多かった。その目で資料を見ると、「本館は昭和〇年まで、この資料を持っていなかったのだ⁉」（他の部局にはあったかも知れないが）とか、「新村出博士に縁のある資料だったのだ」とか、種々考えることがあった。

これは、釧路校の図書館とは、質に差のある蔵書のあり方であった。

当時は、こんな風だった。

（三）

当時、大きな古書展示即売会が、年間三回も行われていた。さすが、京洛の地、釧路では一度も開かれない会が、年三度も開かれるとは、と感動した。

三回の内の一回、夏の古書展。下賀茂神社境内の、屋外展の時であった。

暑いさ中、ある時は一人で、ある時は知人と、毎日通った。

知人と行った時は、購入品を誇らしげに見せ合いながら、乾いた喉を潤していた。これも、釧路では、できかねることだった。自慢し合える相手もいないから……

その際、「Pallis」なる署名の入った本を多く目にした。聞けば「パリスさんの蔵書」とのこと。

パリスとは、ベルギー人のメソポタミア考古学者、歴史学者。その旧蔵書の内、考古学関係のものは、江上波夫博士の手で古代オリエント博物館に収められている、と言うことは人に聞いた話。

目にする度に購入したところ、ダンボール箱五箱位になった。

さすが洛中、「犬も歩けば棒に当たる」の思いを強くした。

当時は、こんな風だった。

ここで終りにすれば良いのだが、続きがある。

退職後、親族の都合で、内地の実家に戻らざるを得ず、パリス本を所蔵し続けることが叶わなくなった。

そこで、有縁の寺院に寄進した。

合理的なものは、合理的に姿を消す。非合理的なものは、合理的には姿を消さない。